イメージ画にみる母子関係　その3

おとす母とうたれる私

やまだようこ

1　しかる母

このごろは、甘口で柔らかいプリンのような母親や、「今日は何を食べたい？」と王様のごとき子どもにお伺いをたててハンバーグやカレーをつくる母親が氾濫している。大人も子どもも仲良くお子さまランチを食べて「ゲップ」を出している過保護で飽食の時代である。

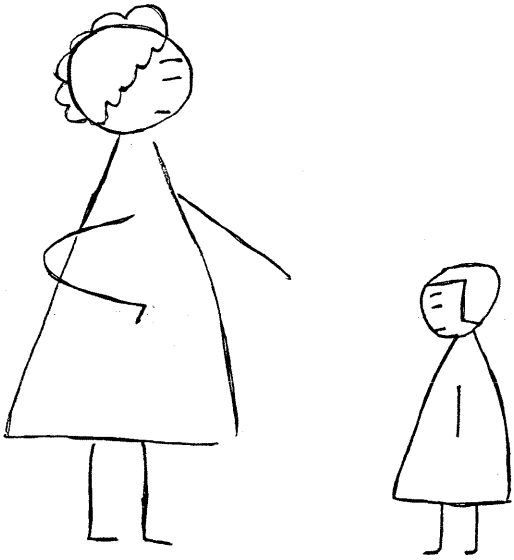
だから子どもを厳しくしかりつける母親の姿を思い描く人は、現代では少数派かもしれない。しかしまた一方では、子どもを支配下に入れて思いのままに統制し、モンスターのごとく君臨するママゴンも少なくない。

子どもをしかるには、母親の思いこみであれ何であれ、「どうしてもこうでなければならない」という母自身のポリシーと、強いエネルギーが必要である。それゆえしかる母のイメージには、良きにつけ悪しきにつけ、真剣味と迫力がある。今回は特に私の拙い解説よりも、絵そのものが直にわたしたちの情熱を揺さぶるすごさを味わっていただきたい。

またこれらは今までにも述べてきたように、単に「母子関係」だけではなく、「父子関係」「師弟関係」「上司―部下関係」など、さまざまに読み変えることができ

る、人間関係のありようのひとつでもある。

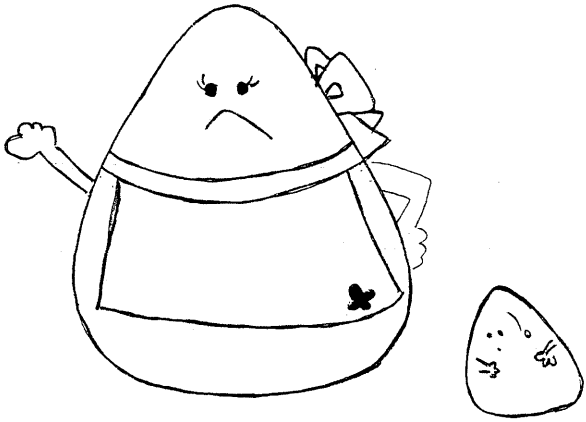
2　並んで立ち、手をあげる母



▲図1　並んで指図する母

母は何でもできる偉大な人であり、ほぼ母にいわれたとおりに私は行動していた。

図1と図2を見ていただきたい。2つの絵にはいくつかの共通点がある。母は怖い顔をして怒っているが、特に手のしぐさは特徴的である。一方の手は腰にあてら

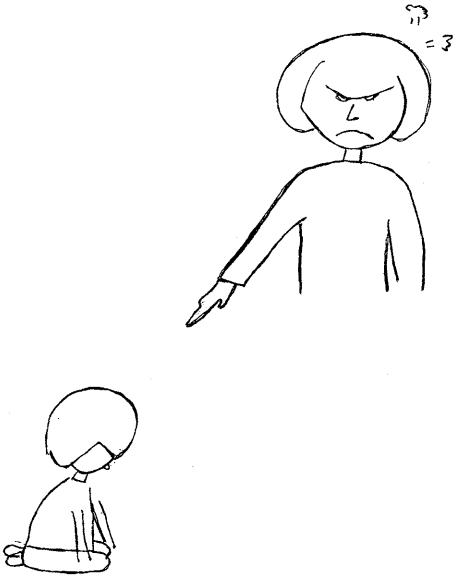


▲図2　並んで立ち　こぶしを上げる母

今でもそうだが小さい頃はよくしかられ、体が小さいこともあって、よくたたかれた。この頃は、少しくずれたけれども、母は偉大だというイメージをもっていた。

れ、もう一方の手は子どもに向って指図するかのように突き出されたり、握ったこぶしが突き上げられている。このように威圧的なポーズで立っている母に対して、子どもは、母親に向って、頭や体を少したれて神妙な表情をしている。

人間が、他の人を支配したり威圧しようとするとき、あるいは怒るときの姿勢やしぐさは、似通っているようである。だがこの場合には、説明文に両方とも「母は偉大」と書かれているように、子どもは母の権威をそれなりに認めており、両者のあいだには幾分ユーモラスな雰囲気もある。



▲図 3　斜め上から指摘する母

小さいころと言ってもどのくらいの時かわからないが、よくおこられていた。母はしつけにきびしかった。

▲図 4　斜め上からどなる母

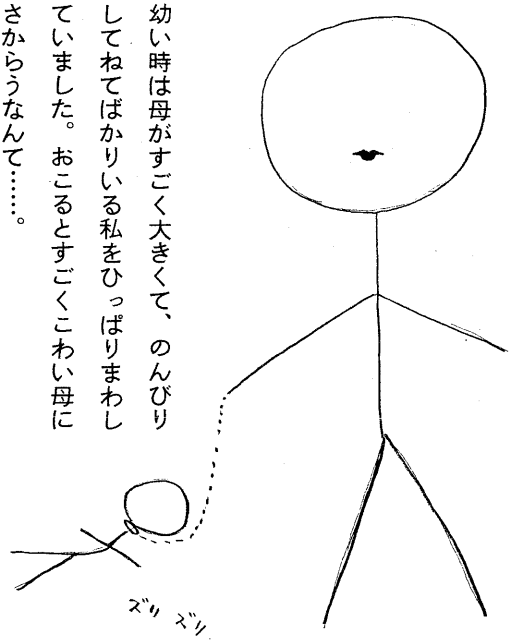
いつもおこられて、手がとんできて泣いていた。

3　斜め上の、身体部分だけの母

図3、図4、図5を見ていただきたい。これらの絵では、先に見た絵と比べると、母親の姿はいちだんと怖いようにみえる。先の母親は、子どもと同じ地平線上に立っていたのに対し、これらの絵では母親は斜め上の位置に移行していて、子どもとの上下関係がさらに強調されている。

そして興味深いことに、母親はもはや子どもと同じような全身像としては描かれていない。母は身体下部が切れて宙に浮いていたり、口だけが強調されている。また子どもも、ひざまずいて謝ってたり、泣いていたり、鎖につながれて引きずられていたり、母にさからうことができない、あわれな姿で描かれている。

◀図5　口紅だけの母

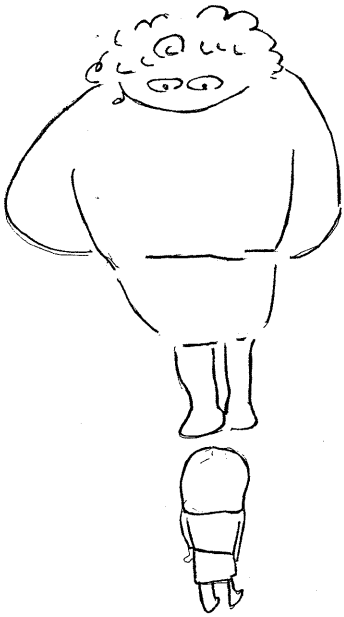


幼い時は母がすごく大きくて、のんびりしてねてばかりいる私をひっぱりまわしていました。おこるとすごくこわい母にさからうなんて……。
鏡に向かって化粧をしているところをのぞくと、よくしかられたものです。

4　真上から見下ろす、圧倒的に大きい母

図6、図7を見ていただきたい。これらの絵では、母親がさらに完全に真上に移行し、子どもを上から見下ろす、圧倒的に大きく威圧する姿として描かれている。口だけの母も怖いが、真上に立つ母からにらまれ監視されるのは、もっと怖いかもしれない。そして母の顔は正面向きで大きく個性的であるのに対し、子どもは後ろ向き

いつでも母は私を上から見下ろし、絶対的な存在でありました。神様よりえらく、よく働く母は、自慢の対象にこそならないけど、(派手さがないものですから) 尊敬するべき人だと思ってました。



▲図6　真上から見下ろす母

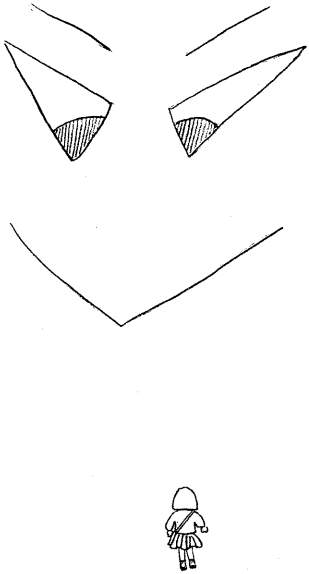
で小さく独自の表情や感情さえ無いようにみえる。

5　真上から打つ、かなづちの母

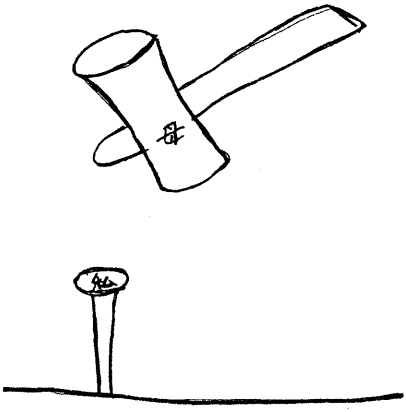
図8、図9、図10を見ていただきたい。これらの絵では、母親はもはや人間の部分でさえなく、私を打ちつけるかなづち、私の上にのしかかるつけもの石のような圧力、円である私を切り裂く鋭い三角形の教育ママゴンなど、非人間的な物体に変身している。

これらの構図は、上下関係を逆転させれば、親ガメの上の子ガメなど「ささえる母」の絵にもなる。位置を逆転するだけで、その関係は天と地ほどにちがってしまう。

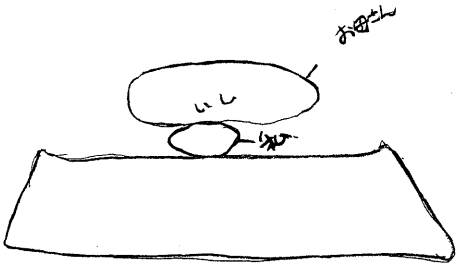
いつも怒られてばかりいて、常に監視されていた。



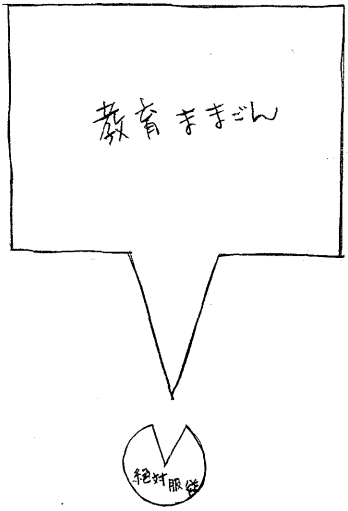
◀図7　真上から監視する母



◀図8　釘(私)を打つ　かなづち(母)

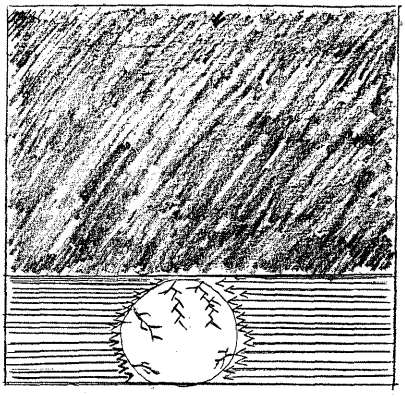


▲図9　私の上の石（母）



◀図10　教育ままごん

子どもにとって打たれることは辛く悲しい。ただし母を機能としてみれば、支える母は「良い母」だが、打つ母は「悪い母」だと簡単にいうことはできない。「出る杭は打たれる」「鉄は熱いうちに打て」「嫁御と麦は最初に踏め」「可愛い子は打って育てろ」「可愛い子には灸をすえ、憎い子には砂糖をやれ」などのことわざにみられるように、打つことも、それなりの教育的機能をもつだろう。



▲図11　私を押しつぶす暗闇

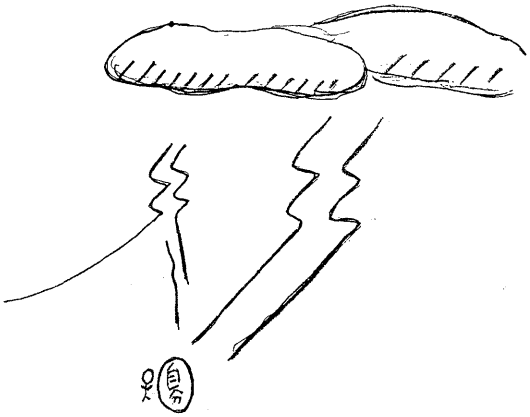
母が私にとっておそろしい存在、かばってくれる存在ということを表すために斜線にしました。円にひびがあるのは不安感です。矢印は孤独感です。

私にとって幼い頃の母は保護者であり、又、精神的な意味での攻撃者（叱られてばかりで、ほめられた記憶がほとんどない）であり、畏怖の存在でありました。私はいつもびくびくし、精神的な安定感はなかったのです。

母の顔は怒り顔しかおぼえていません。

6　真上からおちる、雷の母

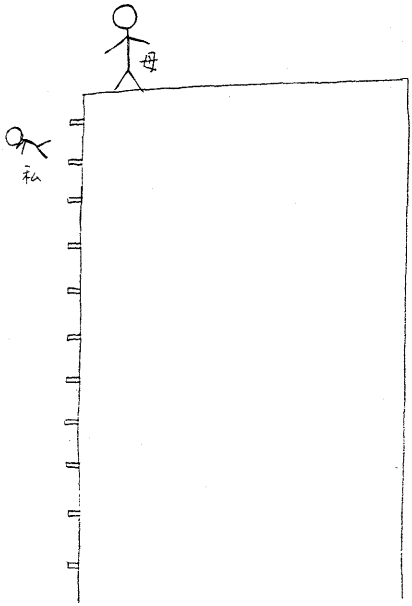
図11、図12を見ていただきたい。これらの絵では、母親は物体としての明確な姿や意志を読みとることができない、怖い自然現象として描かれている。雷は、いつどこへ落ちるか予測をたてることが困難なので、恐怖や不安をもたらす。また、びくびくしてひび割れたような自



▲図12　おちる雷

音を出して、とにかく恐ろしいというこわい存在。

◀図13　おとす母



幼いときの母は、私を自分の理想通りに成長するように育てたかったようであり、母の理想は、どんな苦労にも耐え、常に努力することを忘れない人間である。しかし母の敷いたレールの上を常に走る子供も、母の理想の一つであった。

己像は、反抗してとび出て打たれるクギよりも、さらに悲惨である。

このように、母親の位置が私から離れて上部へ移行するほど、母は人間の姿から離れていくようである。そして圧倒的な力関係で、子どもの存在を脅かしている。

7　おとす母

図13も、たとえようもなく怖い絵である。この絵では、上下関係の強調は、母が上部へ移動するというやり方ではなく、子どもが下部へつき落とされるというやり方で達成されている。虎は我が子を谷底へつき落として、はいあがってきた強い子だけを育てるなどといわれているが、信頼していた母親から奈落へつき落とされる子どもは、どんな気持がするのだろうか。

（愛知淑徳大学）